

白山ふるさと文学賞

第五回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

小学生高学年小説の部 最優秀賞

# とくべつなねこの人形

朝日小学校五年

高橋 たかはし

佑美 ゆみ

私は、三歳の時にもらったネコの人形を五年生の今でも持っている。父の仕事の関係で、よく引っ越しをしていた。保育園の時はよかつたけど、小学校に入ってからからは、少しいやになった。いやなことや、ヒミツにしていることを、私のネコの人形に話していた。そして五年の夏休み、とある出来事があった。

その日は、一人で家にいた。そして、自分の部屋の方から声が聞こえた。「ありがとう。」

聞こえたところへおそろおそろの見に行った。何も変わったところはない。聞いたところへおそろおそろの見に行った。何も変わったところはない。聞いたところへおそろおそろの見に行った。何も変わったところはない。

その日の夜、またネコの人形に話しかけた。

「今日、不思議なことがおきたなあ。」

と言ってすぐに眠りについた。

次の日、また自分の部屋から声がした。

「いつも話しかけてくれてありがとう。」

昨日と同じように見に行った。でも昨日とはちがってネコの人形が動いてしゃべっていた。

「三歳のときから大切にしてくれてありがとう。ぼくは午前中の三日間だけしゃべれるの。」

と言った。私は、半信半疑だった。不思議でいっぱいだった。

「じゃあ明日までだね。」

と言った。時刻は午前十一時を過ぎていた。

「今日はもう話せないね。」

私は言った。

「明日ヒミツの場所に連れて行ってあげる。」

とネコの人形が言った。

「あと、言い忘れた。このことは絶対に誰にも話さないでね。」

と言った。私は、

「じゃあ、ヒミツの場所は、何時に行くの。」

「朝の八時に行く。」

と言い、その後は何も言わなくなった。

次の日の朝、いつもより早く起きた。ネコの人形が言っていたヒミツの場所へ行けるからだ。

約束の時間になった。わたしはワクワクしていた。

「やあ、今からヒミツの場所に行くよ。」

とネコの人形が言った。ついていくと、

「ここだよ。」

と言った。そこは私の部屋のクローゼット。

「まずはあなたがあけてみて。」

と、ネコの人形は言った。私があけてみると、いつもとあまりかわったところはなかった。

「今度はぼくがやるよ。」

とネコの人形は言った。ネコの人形が開けると、なんとそこには、森の大きな公園があった。私はなんで？と不思議に思った。そして、ネコの人形は洋服を着ていた。

「わたしの本当の名前は、ミルです。しゃべれなくなってもそう呼んでね。」

とネコの人形ミルが言った。私はこんどからそう呼ぶことにした。その後、ミルと森の公園でめいっばい遊んだ。

「ここはすごいおもしろい公園だね。アスレチックもあるし。」

と私は言った。その時、ほかのネコの人形がたくさん集まってきた。そのネコの人形は、私をかんげいしてくれた。そしてみんなで遊んだ。

時間はあっという間に過ぎた。私の時計は午前十一時をさしていた。

「ミル、もう帰らなきゃいけない時間だよ。」

と私は言った。でもミルは、

「まだ大丈夫。安心して。」

と言った。その時、さっきまでいたネコの人形が、ミル以外、全員逃げた。私は不思議に思い、ミルを連れて、アスレチックのかげに隠れた。私は、何かやってくるのかと思ったからだ。

「ちよつとみてくる。」

とミルはかげから出て行った。私は、かげでじっと、ミルが戻ってくるのを待った。

その時、

「キヤー、助けて！」

とミルが言った。私は、ミルの声がしたところへ行った。そこには、凶暴で私の背よりはるかに大きい、ノラネコが出てきた。

「さあ、このおれ様に森の公園をよこせ。」

とノラネコが言った。私は、

「ここは、みんなで遊ぶ公園だよ。」

と言った。すると、ノラネコは、

「公園をかけて勝負するか。」

と言った。私は怖かった。凶暴だから負けてしまうと思った。でも、このまま放っておくと、ノラネコが独りじめしてしまうから、私はノラネコと勝負することにした。私は、

「おい、ノラネコ、私と勝負するんだ。」

と言った。するとノラネコは、

「いいだろう。ルールは、ギブアップするまでだ。」

と言った。

勝負が始まった。ノラネコは私を攻撃してきた。つめでひっかいたり、おいかけてきたりした。私はすごい傷ができた。もうだめかと思ったその時あることを思いついた。

「ねこじゃらしでおびきよせて攻撃だ。」

と私は小さい声で言った。たまたま近くにいたネコにねこじゃらしを頼んだ。しかも大きなものを。

私はねこじゃらしでおびきよせて攻撃をした。ノラネコは、

「ギブ、ギブ、やめてくれ。」

と言った。私の勝ちだ。私は、

「おい、ノラネコ、今度からやさしくしてね。」

と言った。すると、今まで公園だったところが自分の部屋にもどった。傷も治っている。しかも公園に入った時間だった。そして、ミルが何もしゃべっていなかった。

ミルのそばに一つのメモが置いてあった。

「ありがとう。ずっと大切にしておいてね。」

と書いてあった。それからもうミルはしゃべることはなかった。

